

## 初期アメリカの安息日厳守主義

村上良夫\*

Early American Sabbatarianism

Yoshio Murakami \*

*Received October 28, 1999*

### I. はじめに

1961年5月29日、米国連邦最高裁が、日曜日の商業活動を禁じる「日曜休業法」の合憲性を認める判決を下したことは、よく知られている<sup>(1)</sup>。ところで、この判決を報じた『ニューヨークタイムズ』の記事の見出しに「植民地時代に由来する日曜安息法 (“Blue Laws, of Colonial Origin”)<sup>(2)</sup>とあるように、また、法廷意見がはっきりと、現在の日曜休業法 (Sunday closing laws) は植民地時代にさかのぼると述べているように<sup>(3)</sup>、日曜法は植民地時代に起源を持つものである。しかも多くの州は、今なおなんらかの日曜規制を有している。1985年の時点でも、22州が一般的な日曜法規を持ち、17州が日曜日における特定の行動を規制しているのである<sup>(4)</sup>。

日曜法 (Sunday law, blue law, Sunday closing law) は、いわゆる「安息日厳守主義」(Sabbatarianism)、すなわち厳格な日曜遵守の顕著な表現といえるが、日曜法が、衰退しつつあるとはいえ、いまだに存在しているということは、植民地時代からの安息日厳守主義が過去のものではないことを示している。初期アメリカの安息日厳守主義は、今日のアメリカにもかわる問題なのである<sup>(5)</sup>。

初期アメリカの安息日厳守主義が産み出したものは、日曜法だけではない。アメリカの社会と文化の形成そのものに、広く深い影響を及ぼしたと考えられるのである<sup>(6)</sup>。

日曜法という形で現代にまでその痕跡を残し、しかもアメリカの社会と文化の形成に深く大きな影響を与えたと見ることで、初期アメリカの安息日厳守主義を、史料に即して検討することが本稿の目的である。まず全体的背景を概観したうえで、具体的特徴を分析する。その場合、実践面と神学面の両方から考察していくことになる。

---

\* 外国語学部  
Faculty of Foreign Languages

## II. 背景

イギリスの教会史家キース・L・スプランガー Keith L. Sprunger は、「英国とオランダの安息日厳守主義と、ピューリタン社会神学の展開」と題する論文（1982）の中で、次のように述べる。

ピューリタンたちは安息日厳守主義を、万人に対して明確に示された神の意志であると考えた。イギリスのピューリタンたちは故国を離れて移っていくとき、西のほうアメリカへ行こうが東のほうオランダに行こうが、厳格な安息日遵守の教義を携え伴ったのであった<sup>(7)</sup>。

その通りであるが、しかし、この説明だけでは不十分である。なぜなら、彼らがイギリスから出て行ったまさにその理由の一つが、イギリスでは安息日を厳格に守ることが困難だという点にあったからである。事実、国王ジェームズ1世が、ピューリタンの安息日厳守主義を批判し、日曜午後のレクリエーションや運動を勧める『スポーツの書』を發布（1618年）すると<sup>(8)</sup>、ニューイングランドへの移住は一段と加速する<sup>(9)</sup>。一つの例としてエドワード・ジョンソン Edward Johnson（1598-1672）の証言を見てみよう。1630年にボストンに移住した彼は、ニューイングランドの歴史を描くその最初の章を「主の民が移住を始めたころのイギリスの嘆かわしい状態」と題して、1628年当時のイギリスをこう描くのである。

イギリスにおいて人びとの信仰が古のラオデキア人のように冷えきってしまったころのことである。この国よりカトリック教会の諸制度を放逐することを忘れて、人びとはローマの偶像崇拜を受け入れようとしていた。いやそればかりか、異教徒がヴィーナス、バッカス、セレスに捧げるような儀式でもって安息日を流そうとする下劣な流神の輩を助長するような布告が、各教区の教会に下される体たらくであった。その結果、不信心不品行の輩、カトリックに惑わされた輩がいなごのごとくにわが国土を覆いつくすこととなりはてた。長きにわたる坊主どものこのような専横を極めた支配から民を救わんとして、われらの教会の輝かしい王キリストがイギリスより軍勢を起し給うたのは、ちょうどこのことであった。イギリスの隅々にまで邪な敵の悪意が満ちているのを見給うた主キリストは、その先陣を育むべき地として新しきイングランドを選び給うたのであった<sup>(10)</sup>。

イギリスを離れてアメリカへ移り、そこに新しきイングランドを建設するにあたっての「安息日」の重要性を、こうした記述から読み取ることができる。

それだけではない。いわゆる「ピルグリム・ファーザーズ」たちが最初はイギリスからオランダに移住し、しかし結局はアメリカに渡ったのも、安息日問題が大きな要因だったと考えられるのである。ピルグリム・ファーザーズの指導者のひとり、プリマス植民地の総督として約30年も責任を負ったウィリアム・ブラッドフォード William Bradford（1590-1657）は、貴重な記録『プリマス植民地について』の中で、オランダに11、2年生活したのち、「ついにどこかほかの場所に移住するという結論に傾きはじめた」事情を次のように説明する。オランダでの

生活はひじょうに苦しいものであり、多くの者は年が寄り、若い者も重労働に圧迫されて弱っている。

しかしもっと嘆かわしく、あらゆる悲しみの中でも堪えがたいほど苛酷なものは、子供たちの多くが、このような事情によって、またこの国の若者のあいだのひじょうな放縱やその土地の幾多の誘惑によって、悪い手本にならって、節度を失い、危険な道に引きずりこまれ、たががゆるんで両親から離れてゆくことであった<sup>(11)</sup>。

これはいったい何のことであろうか。ブラッドフォードの書を編集した現代アメリカの著名な歴史家サムエル・E・モリソン Samuel Eliot Morison はこの部分に関する「注」の中で、オランダ人はピューリタンのような厳格さで「安息日を覚えてこれを聖とせよ」とはしなかったと解説する。「教会での礼拝が終わったあとの日曜午後は、特に子どもたちにとっては、ごちそうを食べて遊んだりする楽しい娯楽の日であった。これはイギリスからのピューリタンたちにとっては、最も我慢ならないことのひとつだった」<sup>(12)</sup>と。この点は英国の歴史家クリストファー・ヒル Christopher Hill も指摘している。「オランダでは主の日の遵守が非常になおざりにされていたということが、ピルグリム・ファーザーズたちにはきわめて嘆かわしいことであり、それが彼らをしてアメリカへと向かわせた理由の一つであった」<sup>(13)</sup>。

もう一つだけ例をあげてみよう。ボストンの指導的な牧師であり神学者であったコットン・マザー Cotton Mather (1663-1728) は、父祖たちから伝え聞いた状況を次のように述べているのである。

彼ら〔ライデン在住のピューリタンたち〕は、10年間の努力にもかかわらず、隣人たち〔オランダの新教徒たち〕を主の日の適切な遵守へと導くことはできなかった。主の日の正しい遵守なくしては、実際の宗教は必ず、みじめにも衰えてしまうということを、彼らは知っていた<sup>(14)</sup>。

以上見てきたように、安息日の厳守にこだわるピューリタンたちが、まさに安息日を厳格に守りたいがゆえにイギリスやオランダを離れてアメリカに渡ったと考えられるのである。もちろんそれが全てではなかったであろうが、しかし少なくとも安息日厳守主義がアメリカ移住の一つの大きな要因であったことは確かである。はるばるニューイングランドにやってきたのはほかならぬ筋金入りの安息日厳守主義者たちであった、と言ってもよいであろう。さてそれでは、そうしたまじめな安息日主義者たちが集まってきたニューイングランドはどうなったか。それを具体的に見ていくことにしよう。

### Ⅲ. 初期アメリカの安息日厳守主義

「初期アメリカ」という言い方はあいまいであるが、ここでは植民地時代、特に17世紀初めから18世紀半ばまでを指すものとする。地域的にはニューイングランドを主たる対象とする。

## A. 基調

まず最初に、初期アメリカの安息日厳守主義の土台となっていたと見られるいくつかの点を押さえておく。

第一。安息日は神とピューリタンたちとの間の契約の、目に見えるしるしであった。安息日は神の選民のシンボルとして、重要な意味を持っていた<sup>(15)</sup>。

第二。ピューリタンたちは、安息日を破ると言う罪に対しては神のさばきが下ることを強調した<sup>(16)</sup>。これは今触れた第一点からの当然の帰結であろう。自分たちは神との契約のもとにあり、自分たちの行動は神の恩恵を左右すると彼らは信じた。従って、物事がうまく運ばぬときは人々は断食や祈祷の日を持ち、うまく行ったときには神への感謝の日を設けたのである<sup>(17)</sup>。そのような中で、神との契約の象徴とも言える安息日を破るという罪は、はなはだしく恐ろしいものであった。

例をあげてみよう。1679年、「改革」の訴えのもとにボストンで開かれた教会会議では、ニューイングランドに対する神のさばきを招いている13の罪の中で、特に安息日破りに重大な警告を発している。

安息日破りがはなはだしい。多くの者が、主の聖日に公の礼拝を自ら休んだり家の者を休ませたりすることによって神のみ名を汚している。……安息日の開始について意見の相違があるなどと口実をつけて、第四戒が命じる第七日を主に聖なるものとして守ることをしていない者が多くいる。礼拝に集うためとか必要なわざ・憐れみのわざを行うため以外に、歩き回ったり出かけたりすることが、安息日のありふれた行為になってしまっている。これは律法が命じる休みとは相容れぬものである。さらに、安息日が始まってから、あるいは安息日が終る前に、自分たちの特定の労働や作業を行う者たちもいる。世俗的な、不適當な会話が、主の日に非常によく見られる。これは、主の聖日にはおのが楽しみを求めず、むなしき言葉を語るなかれという聖書の戒めに反するものである。イザヤ58章13節。……こうしたことが神の怒りを、火を、他のさばきを、神の民と称する者たちの上にもたらすのである。ネヘミヤ13章17、18節。エレミヤ17章27節<sup>(18)</sup>。

第三。安息日厳守主義は、ニューイングランド共同体のかなめであった。安息日の遵守は、個々人の事柄であると同時に社会全体の問題であった。安息日は、まさしく神の選民、神が選ばれた国民のシンボルであると共に、神の共同体を一つにする手段でもあった。安息日厳守主義はきわめて社会的な意味を持つものだったのである。

## B. 実践

### (1) 実例

ニューイングランドにおける安息日厳守主義の実際を、よく知られている人物たちの記録から、二、三具体的に見てみよう。

マサチューセッツ湾植民地の初代総督ジョン・ウィンスロップ John Winthrop (1588-1644) は植民地に関連した出来事の克明な記録を残しているが、その中で、1631年4月12日の「日誌」には、ロジャー・ウィリアムズ Roger Williams (c.1603-1683) の問題についてこう記している。

ボストンで開かれた会議……の結果、次のような手紙が……書かれた。すなわち、ウィリアムズ氏はボストンの会衆に加わることを拒否している。なんとなれば、彼らはイングランドにいた時に国教会の人々と共に聖餐にあずかっていたことに対し自らの悔悛を公に告白していないから、というのである。さらに、行政官は安息日の破れを、そしてまた[十戒の]第一の板にあるいかなる破れをも、罰するべきではないと断言している<sup>(19)</sup>。

この記録から、安息日に関し二つの事実が浮かび上がる。ひとつは、ウイントン・U・ソルバーグ Winton U. Solberg が、初期アメリカにおけるピューリタンの安息日主義を考察した名著『時をよく用いよ』(1977)の中で言及しているとおり、信教自由の先駆者とされるロジャー・ウィリアムズが良心の自由のための最初の議論を戦わせたのは安息日の問題に関してであった、という事実である<sup>(20)</sup>。もうひとつは、ウィリアムズが憤慨したほどに、厳格な安息日遵守が行政当局によって現実強制されていたという事実である。

別の例を見てみよう。半世紀後のものであるが、コットン・マザーは日記にこう記している。

わが心に浮かぶ想念は、イザヤ56の4。

主は宗教の全体を、「わが安息日を守れ」という句に表わしておられる。

個人であれ人民であれ

宗教が正しく栄えるには、安息日が正しく守られねばならぬことは確かである。

しかし、安息日の厳格さが捨てられるなら、宗教は朽ち衰えてしまうであろう。

まことに、安息日を厳格に守らぬことは、最大の不信仰への道であり歩みである。

祈りについて、罪が人をして祈れなくさせるか、それとも祈りが人をして罪を犯さなくさせるかであると言われてきた。これは安息日についてもいえることである。[1681年9月19日]

決意。われらの地域で安息日が守られているかを、十人組長たちに再び調べさせることにする。

罪の多くがこれによって防げるであろう。[1683年9月24日]<sup>(21)</sup>

厳格な安息日遵守がキリスト教信仰の土台であるという信念がはっきりうかがえる。しかもそのために公権力が用いられている。「十人組長」(Tithing-men)とは、住民を礼拝に出席させ、また礼拝中の集会の秩序を保つことを務めとする役人である。毎年、地域住民によって選ばれ、その地域の道徳上の警察といった役割を果たす存在であった<sup>(22)</sup>。

17世紀の終り頃になっても、マザーは相変わらず人々の安息日遵守のだらしなさを嘆じている。

神聖な安息であるはずの主の日が、余りに多くの冒瀆によって乱されており、地には安息がないのではないかと疑わざるをえないほどだ。[1697年1月14日]<sup>(23)</sup>

マザーはまた、1702年発行の『マグナリア』の中で、次のように述べている。

われわれすべてに他にまさって推奨さるべき信心の一項目がある。それはすべての信心の中心となるものであるが、主の日を聖とすることである。何名かの、非常に分別ある人々が認めたことであるが、主の日を……聖としたときに、その週は物事がうまくいくのが通例であるという。諸君、われわれの町が万事において繁栄することを願うなら、主の日が模範的に聖とされるよう努めるに如くはない。……私は恐れる、われわれの中に、汝は安息日を汚すことによってポストンの上に怒りを招いていると言われる者が、大勢いるのではないかと私は恐れる<sup>(24)</sup>。

米国初期の最大の神学者にして大説教家とされるジョナサン・エドワーズ Jonathan Edwards (1703-58) は、1740年頃、安息日に関する説教の中でこう語っている。

次のことにお気づきでありましょう。すなわち、安息日が正しく守られているところでは、一般に信仰そのものも非常に繁栄している。安息日が注目されず重要視されないところでは、信仰もしっかりしたものとはなっていない、ということであります<sup>(25)</sup>。

ホートン・デイヴィス Horton Davies が『アメリカ・ピューリタンの礼拝, 1629-1730』(1990) で指摘しているとおり、「汚されない安息日」こそ「ニューイングランドのピューリタニズムの品質証明印」<sup>(26)</sup>であった。厳格な安息日遵守こそニューイングランドのキリスト教のシンボルであったのである。

## (2) 法令

安息日厳守主義が現実に生活を律する形態として現れるその最たるものが日曜法である。ヴァージニア植民地で1610年に制定された、米国最初の日曜法を見てみよう。

すべての男女は、安息日午前は礼拝と説教に出席し、午後は礼拝と教義問答に出席せねばならぬ。もし違反した場合、初回はその週全体にわたって糧食と手当を失い、2回目には手当を失ううえに鞭打たれ、3回目には死刑に処せられる<sup>(27)</sup>。

ヴァージニアはピューリタンの植民地ではなかった。しかしそれでもやはり、経済的動機と共に、神の国を打ち立てようという願望が根底にあったのである。従って、最初から英国国教会が公定宗派であり、主の日も守られたのであった<sup>(28)</sup>。米国最初のこの日曜法に関してソルバークが指摘するとおり、「公の礼拝を無視した場合の苛酷な罰は、適正な安息日遵守が宗教と公共の秩序の砦だとする信念を実証するもの」であった<sup>(29)</sup>。

さて、ここで特に三つの点に注意しておきたい。

第一点。日曜法は単に宗教的な規制ではなく、社会的な意味、社会的機能を有するものであった。当時の国家は一種の宗教共同体とも言えるものであったから、当然のことかもしれない。いずれにしろ安息日の遵守は、あらゆる異端的な思想や実践に対して公定の教会と公共の秩序を守るための砦であり防波堤であったのである<sup>(30)</sup>。それゆえに、たとえばキューカー問題が起きたあと、ニューイングランドでは安息日遵守はいつそう厳格なものとなった<sup>(31)</sup>。そのように、

日曜法はいわば社会秩序の監督者としての役割を果たしていたと言えるのである。

第二点。いわゆる「ピーターズの法令集 Peters Code」は、偏見があるし誇張されてはいるが、しかし“ブルーロー blue laws”<sup>(32)</sup>と呼ばれる厳しい日曜法は、現実に存在したものであった。サムエル・ピーターズ Samuel Peters<sup>(33)</sup>はコネティカット植民地の生まれで英国国教会の聖職者であった。彼は“忠誠派”であって独立革命の際に英国に亡命し、1781年ロンドンで反ピューリタンの『コネティカット一般史』を出版する。そしてこの書の最も有名な、あるいは悪名高き部分が、ニューヘイヴンの日曜法を扱ったところなのである<sup>(34)</sup>。おそらく、最もよく知られた例の一つは「安息日もしくは断食日には、女は（自分の）子どもにキスしてはならない」<sup>(35)</sup>というものであろう。しかしこれは明らかに誤りであって、こんな規制など存在しなかった。けれども、こうしたでっちあげの法を別とすれば、ピーターズが論じているさまざまな厳格な法規の半分以上は実際にニューヘイヴンに存在したのであり、またニューイングランド全体を含めれば、ピーターズの言う厳法の5分の4は本当にあったものなのである<sup>(36)</sup>。宗教的違反に対して死刑を科すような苛酷な罰則が、現に存在したのであった。

第三点。米国最初の日曜法は確かに死刑を規定しているが、しかし、安息日の礼拝を無視したがゆえに死刑に処せられたという記録は、見つかっていない<sup>(37)</sup>。ニューイングランド全体としても、植民地議会は通常の安息日破りには忍耐強さを示すのが通例であった<sup>(38)</sup>。クエーカー教徒の場合に見られるように、宗教問題が公的秩序を乱す場合にのみ、公権力は断固たる措置をとったのである<sup>(39)</sup>。すなわち、法の文言においては非常に苛酷であっても、日曜法の実際の運用には柔軟な面があったと考えられるのである。

安息日遵守に関しては、日曜法以外にも別のタイプの規制があった。それは法体系の中に含まれる、安息日遵守に関する条項である。その典型をわれわれは、マサチューセッツ湾植民地で1648年に公布された『一般的な法と自由の書』に見ることができる。この法典はマサチューセッツのその後のすべての法律の基礎となったものであり、またコネティカットやニューヘイヴンはじめ他の植民地の法律に多大な影響を及ぼしたものであった<sup>(40)</sup>。

さて、この『法と自由』の書には、安息日遵守を規定する4つの条項が含まれている。

この法域の中で、福音の秩序にしたがって御言葉の奉仕がなされるところへはすべて、主の日に、また当局の指示のもとに遍く守らるべき公の断食日や感謝の日に、各人は正しく赴き出席しなければならない。もし誰かこの法域の中の者で、説得されてもなお、正当かつやむをえぬ理由なくして公的礼拝を欠席する者は、それら公の集会を休むごとに5シリング没収される<sup>(41)</sup>。

この法域のクリスチャンで……第四戒の教えを否定したり、他の者たちをしてそのような異端へと誘う場合、説得を受けてもなお頑固にそれ続けるなら、そのものは追放に処せられる<sup>(42)</sup>。

われらが法域内のどの警吏も、……酔っ払い、神のみ名の冒瀆、安息日破り、虚言、放浪者、夜間うろつく者……などを令状なしで逮捕する権限を有する<sup>(43)</sup>。

誰であれ不法侵入や野外・屋内での強奪行為を主の日に犯した者は、前記の罰に加え、

初犯には片方の耳を切り落とされねばならない。同種の違反を二度目に犯したなら、同様にもう片方の耳を失う。もし三度も同様な違反を犯したなら、それも敢えて犯したと議会が判断したなら、彼は死刑に処せられねばならない<sup>(44)</sup>。

これらの規定から明らかなように、主の日における礼拝出席が明確に義務づけられている。安息日遵守が第四戒に基づき強制されている。安息日の仕事や旅行は“安息日破り”として禁じられている。安息日は泥棒たちの稼ぎ時であったろうが、その罰は週日の場合より厳しいものであった<sup>(45)</sup>。ソルバークが指摘するとおり、マサチューセッツ植民地のこれらの法は、安息日遵守に関するピューリタンの標準を強制する権限を政府に与えるものであった<sup>(46)</sup>。そして、このようにして法によって強制される安息日遵守が、ニューヘイヴンやコネティカットなど、他の植民地にも影響を及ぼしたのである。良心の自由という原則を宣言していたロードアイランドにおいてさえ、1750年には、安息日の労働や遊びに対して罰金が導入されている。このことひとつをとって見ても、初期アメリカにおける安息日の重要性がうかがえるのである<sup>(47)</sup>。

### (3) 若干の考察

#### ① 3つのW

安息日厳守主義の具体的内容は3つのWで表すことができよう。すなわち、Worship（礼拝すること）、Withdrawal（差し控えること）、Work（働くこと）である。安息日厳守主義は、安息日における公的礼拝への出席を強調する。安息日には仕事や遊び、旅行を控えるよう強調する。そして、平日には勤勉に働くよう強調するのである。この第3点はしばしば見落とされがちであるが、実はきわめて重要である。平日には勤勉に働くということが、安息日厳守主義の一環をなしている<sup>(48)</sup>。平日の労働と日曜の休みが、安息日厳守主義というコインの両面だと言えるのである。第四戒自体がはっきり命じている、「六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし」（出エジプト記20章9節。新共同訳）と。怠惰は罪であった。実際、マサチューセッツ植民地議会は1633年10月1日、次のような法律を可決している。

……なんびとといえども、家長であろうと他の者であろうと、時を怠惰にあるいは無益に過ごしてはならない。さもなくば、議会が科するに相当と判断する罰を受ける。この目的のため次のことを命じる。各地の警吏は特に注意を払って、この種の違反者たちに気づくようにせねばならない<sup>(49)</sup>。

初期のニューイングランドにあっては、怠惰は二重に“罪”であった。それは宗教的に罪であった。勤勉に働くことは聖書の教えなのだから。ボストンの指導的な牧師であったジョン・コットン John Cotton (1585-1652) が、怠惰は第四戒を破ることになる、なぜなら人はまず働いてこそ、次に休むことによって安息日を敬うことができるのだから、と説いているとおりである<sup>(50)</sup>。怠惰はまた、社会的にも罪であった。開拓期の苛酷な条件の中で、生きのびるためには誰もが協力して勤勉に働かねばならなかったのだから<sup>(51)</sup>。

このように、勤勉に働くことは安息日厳守主義の重要な要素だったのである。



## ②弊害

安息日厳守主義はいくつかの弊害をもたらした。働くな、遊ぶな、旅行するな——いわば健全なレクリエーションをも禁じられると、人はどこへ向かうであろうか。“肉の楽しみ”，とりわけ飲酒である。日曜日の酔っ払いはいふれた光景であった<sup>52)</sup>。植民者が皆聖人だというわけではなかったのである<sup>53)</sup>。

礼拝出席を強要され、他のことは何もしてはならないというのは、若者たちには特に苦痛であった。1650年にニューヘイヴンの植民地議会は、安息日の礼拝の時間に教会堂の外にいる者には2シリングの罰金を課すことを定めているが、若者たちがその対象であったに違いない<sup>54)</sup>。安息日が明けるやいなや、歌ったり、踊ったり、カード遊びに興じる若者たちがけっこう多かった<sup>55)</sup>。18世紀には、安息日の時間が完全に明けた日曜日の夜は、活気に満ちた、しばしば陽気に浮かれ騒ぐ時となったとアリス・モース・アール Alice Morse Earle は記している<sup>56)</sup>。これらは明らかに安息日厳守主義に対する反動であった。宗教の支配は、逆に宗教への反感を生みがちである。初期アメリカの安息日厳守主義が、人間性という観点から見れば問題含みであったことは確かであろう。

## ③教訓話

安息日厳守主義には“迷信”的な言い伝えがつきまとっていた。安息日厳守主義を補強するのに用いられたさまざまな教訓的言い伝え、つまりは超自然的警告といったたぐいのお話である。それらの例話はきわめて具体的で真に迫ったものであり、一般大衆の感情に訴えるには非常に効果的であった。安息日破りをやめて厳格に聖日を守るよう人々に教え込むために、牧師たちはそうした不思議な話に力を入れたのである。内容は単純で、安息日を破る者には特別なさばきが下るといふものがほとんどであった。それが手を変え品を変え、さまざまな“実話”として語られたのである。

ジョン・ウインスロップは日誌に、安息日に肥やしを運んだりして働いたために死んだ人々のことを書き記している<sup>57)</sup>。彼らの死を神の審きによるものと見なし、すべては神の摂理によるとするのである。1679年、ボストン印刷所の創設者ジョン・フォスター John Foster は、ロンドンで出たブロードサイド『安息日を破る者たちへの神の峻厳なる審きの実例』を焼き直したものを発行している。これは主としてトマス・ビアード Thomas Beard の『神の審きの場面』(1597) からとられた、さし絵入りの一連の訓戒であった<sup>58)</sup>。また、ケンブリッジである日曜日、池でスケートをしていたふたりの少年が氷の割れ目から落ちて溺死したとき、当時ハーバード大学の学長をも務めていた牧師インクリース・マザー Increase Mather (1639-1723) は、神が安息日破りを罰せられたのだと見なした<sup>59)</sup>。彼の息子コットン・マザーは一隻の船のことを語っている(1697年)。その船の乗客たちは、長い、そして飢えに苦しめられた航海の間じゅう、一日に一頭、土曜日には二頭のイルカをつかまえることができたが、日曜日には一頭もつかまえることができなかったというのであった<sup>60)</sup>。

このような訓戒と警告の教訓話が広く語られ信じられたのである。従えば祝福、破ればさばき——当時の安息日厳守主義の、これも重要な一要素であり一側面であった。

## ④インディアン伝道

ジョン・エリオット John Eliot (1604-90) は17世紀ニューイングランドにおける「インディアンの使徒」としてよく知られ、聖書をインディアンの言葉に翻訳したことでも有名である。

しかし彼のインディアン伝道の中心に安息日厳守主義があったことはそれほど知られていない。そもそも1646年、インディアンたちへの最初の説教でエリオットは十戒を説明し、違反者への神の恐るべき怒りを告げている<sup>(61)</sup>。まもなく安息日制度が導入され、安息日厳守主義はインディアンの間に広まっていく。伝道者たちの教えを通し、またマサチューセッツ植民地議会の命令を通して、多くのインディアンは6日間働いて7日目に休むだけでなく、ピューリタンの「神」を安息日に礼拝することを重視するようになっていく。ソルバークの表現を借りれば、「安息日遵守はニューイングランドのインディアンたちがキリスト教を受け入れ、イギリスの文明を受け入れたことの、目に見える象徴であった」<sup>(62)</sup>。

インディアン伝道のこうした点からも、ニューイングランドの信仰と生活において安息日厳守主義がいかに中心的な位置を占めていたかがうかがえるのである。

### C. 思想

17世紀米国において安息日厳守主義を最もまとまった形で論じたものは、初期ニューイングランドの代表的なピューリタン神学者として知られるトマス・シェパード Thomas Shepard (1605-49) の『安息日論—安息日の教理』(1649)<sup>(63)</sup>である。これをもとに、初期アメリカの安息日厳守主義の教理・思想の特徴を検討してみたい。

この論考の中でシェパードは、4つの観点から安息日を論じる。すなわち、①安息日の道徳性——人類全体に対する安息日の拘束性、②安息日の変更——第7日から第1日への変更、③安息日の開始時刻、そして④安息日の神聖化——安息日をいかに聖く守るか、という4点から考察するのである。シェパードは安息日の道徳性という最初の部分に最も力を注ぎ、全体の三分の一のページを割いているのであるが、この点が当時最も論議的となっていたことを考えれば<sup>(64)</sup>、むしろ当然かもしれない。しかし、安息日厳守主義という観点からすれば、我々に最も興味深いのは第④の部分である。4つの部分の中では一番短いこの「安息日の神聖化」という章の中で<sup>(65)</sup>、彼は安息日をいかに守るかという具体的な論を展開しており、それが初期アメリカの安息日遵守の思想をよく示していると考えられるからである。

さて、シェパードの安息日遵守論——安息日をいかに聖く守るか——の中で、特に注目に値すると思われるのは以下の4点である。

#### (1) 柔軟さ

安息日には通常の仕事は禁じられているとシェパードは告げる——

……家の掃除は〔安息日には〕すべきではない、前日にすませることができればなら。同様に、店で何かを買ったり、衣服を洗ったりすることは、別の日にすることができればなら、この日〔安息日〕にしてはならない<sup>(66)</sup>。

しかし彼は、続けてこう述べるのである——

さて一方、必要な用であって、あいにく前日や次の日にできないようなものは、この日

〔安息日〕におこなっても罪ではない。……必要な働きは、命を守るためのもののみならず、生活上の快適さや見目の良さのためのものも、違法ではない。……見苦しくない装いをしたり、手や顔を洗ったり、などといった多くのことは、生活上の快適さと同様見目の良さのためにも必要なことであって、これらは〔安息日でも〕罪ではないのである……<sup>(67)</sup>。

要するにシェパードは二つのことを強調している——他の日にできることを安息日にするな。安息日は神聖な日なのだから、聖く守るよう努めよ；だがしかし、安息日を守るということは決して極端な非人間的なものではない、それなりに思慮分別を含む、現実的で柔軟なものなのだ。

さまざまな考えがあつて、その中には極端なものもあつたからこそ、シェパードはあえて注意したのかもしれないが、しかしいずれにしても当時の安息日厳守主義を、まったく常識を欠いた極端なものとするのは正確ではない。ある程度の柔軟性は備えていたのである。

## (2) 喜び

旧約聖書の、すなわちユダヤ教の伝統に従うなら、安息日は本来“喜び”の日であつた。神の新イスラエルを自認する初期アメリカのピューリタンたちにとっても、それは同じであつた。シェパードはこう述べる——

もしも……天においてキリストと共に住みキリストを喜ぶことが可能であるなら、われわれはこの日〔安息日〕それを切望し、それを重んじるべきであろう。しかしそれがまだ先のことである以上、そして、主は教会儀式において天からわれわれのもとへと下りてこられ、……われわれにできるだけ近づいてくださるのであるから、われわれはこの日〔安息日〕、教会儀式に近づくだけでなく、その中の神とキリストに近づくべきである……<sup>(68)</sup>。

平日における聖さや喜び、畏れ、望み、祈りや讃美に満足してはならない。安息日の喜びや畏れ、讃美こそわれわれのこの世での飾りでなければならない。そしてわれわれの内なるすべてが、いっそうの高みへと引き上げられねばならない<sup>(69)</sup>。

安息日の礼拝において、主は天からわれわれのもとに下りてこられる——なんと壮大で荘厳な思想であろうか。神の摂理に対する強烈な確信を持っていた初期アメリカのピューリタンたちにとって、安息日はまさしく神との直接的な関係の象徴であつた。それゆえに安息日は喜びであつたのである<sup>(70)</sup>。

## (3) 終末論

安息日は、きたるべき永遠の安息の前触れであつた——

キリストは労されたのち休みに入られた（ヘブル4章）、そのようにわれわれも労さねばならないがその同じ安息の休みはこの地上で始まり、天で完成するのである。平日の一步一步の歩みに疲れきっていても、罪や悲しみがどんなに多くても、安息日の到来と共にわ

れわれは、「わが魂よ、おまえの平安に帰るがよい」と言うことができるのである<sup>(71)</sup>。

安息日は天国の前触れである、先取りである、と、シェパードは一貫して強調する。この論文の第①部の最初のところで、すでに彼はこう主張しているのである――

……人が競い走り、その行程を走り終え、人生の大きな周期をひとめぐりして永遠の平安に帰るように、週という小さな周期のうちに少なくとも毎週一度は平安に帰るように、そしてきたるべき全き祝福が地上で毎週前もって味わえるようにと、神は深き知恵のうちに整え定めてくださったのである<sup>(72)</sup>。

チャールズ・E・ハンブリック＝ストウ Charles E. Hambrick-Stowe は、17世紀ニューイングランドにおけるピューリタンの信仰態度を考察した名著『敬虔の実践』(1982)の中で、「ピューリタンたちは安息日に、[キリストの]復活を振り返る以上に、[キリストの]再臨における救いのわざの完成を待ち望んだ」<sup>(73)</sup>と指摘している。安息日は終末論的色彩を帯びていた。安息日の準備をすることは、天の永遠の安息日の準備をすることに通じていた。従って、終末に深く関わるこの日を無視したりおろそかにしたりすることは、彼らの信仰理解からすれば言語道断の行為であった<sup>(74)</sup>。

救いの完成である終末を待ち望むという「安息日のこうした前向きの性格は、ピューリタン信仰の前進的性格によく合っていた」<sup>(75)</sup>。ピューリタンは天の王国をめざして前進する巡礼であり、毎週の安息日は旅の途中の休息所であった。このように安息日は彼らにとって、きわめて重要な終末論的意義を有するものだったのである。

#### (4) 強制の論理

政府による安息日遵守の規制を、シェパードは次のように正当化する――

われわれのもとにある人々、あるいはわれわれと関係のある者たちもまた、「汝も汝の息子娘も、汝の奴婢も、汝の門のうちにおる他国の人も」という戒めの中の主の明確な指示に従って、安息日を聖く守るよう、われわれは最大限の労力をしないでよいであろうか？……われわれの子どもたち、しもべたち、また門のうちにいる異邦人たちは、安息日の神聖を汚しがちである。それゆえにわれわれは、彼らが罪を犯さぬよう、そして彼らをして安息日の休みを聖く守らせるよう、取り締まらねばならない。……

家長たる者は自らの門の内がそうした悪に汚されぬよう注意すべきであるとするなら、同じ責務が共同体の長上者にも与えられていると考えて当然ではなかろうか。彼らはいわば大家族の父親なのであって、そのもとにある被統治者たちはいわば門の内においてその裁治権に服しているのであるから。為政者たるものは、被統治者たちの良心に新たな法を課す権限は有していないが、しかし神の律法がすべての者によって守られるよう監督せねばならぬのである<sup>(76)</sup>。

父親は自分の家の中のすべての者が安息日を守るようにせねばならない。同様に為政者はその

共同体の成員すべてが神の安息日を守るようにせねばならない、為政者はいわば大家族の父親として責任があるのだから——初期アメリカの安息日遵守強制的背後には、このような論理が存在していたのである。

柔軟さ、喜び、終末論、強制的論理——シェパードの安息日厳守論の中で注目に値するいくつかの特徴を見てきたのであるが、最後に、これらを一つの中心について言及しておきたい。それは何か？それは神の“臨在感”，神の“実在”の意識，すなわち，神が自分たちのすぐそばにいて，しかも全てを支配し導いているという神の“リアリティ”である。シェパードは「摂理」という言葉を実にひんぱんに用いる。初期アメリカのピューリタンたちは，「摂理と歴史の中において，現在も，また今後も引き続きあらわされる神の働き」<sup>77)</sup>を強く実感していた。そのような「神の臨在に対する強烈な意識」<sup>78)</sup>が，彼らの安息日厳守主義の根底にあったと考えられるのである。安息日厳守主義は，宗教・法・経済・社会等さまざまな分野にまたがるものであったが，しかし何よりもまず，リアルな宗教意識にかかわるもの，生ける神の実在感にかかわるものであったと言えるのである。

#### Ⅳ. おわりに

「ピューリタニズムと言っても多様で複雑であるが，安息日がアングロ・アメリカ・ピューリタニズムの共通の特徴であり，また結びつける要素であった。おそらくは最も重要な要素と言っていいであろう」というソルバーグの指摘は適切である<sup>79)</sup>。そしてこの安息日厳守主義こそが，初期アメリカにおける「人間と社会の性格形成に顕著な役割を果たした」と考えられるのである<sup>80)</sup>。

安息日厳守主義はアメリカ人を宗教的な民とすると同時に，他方では彼らの選民意識ないし独善性の源ともなったと言い得るであろう。自分たちは神の新イスラエルである，神の律法を守り，神との契約のしるしたる安息日を厳格に守る選ばれし民であるとする意識ゆえに，安息日厳守主義はアメリカ人のアイデンティティを育むのに与って力があつたと思われるのである。

また一方，安息日厳守主義がアメリカの経済発展の重要な要因の一つであつたことも確かである。安息日以外の諸聖日を廃すると共に，平日には勤勉に働いて安息日にはきちんと休むという，労働と休息の規則正しいリズムをもたらしたからである。この意味で，初期アメリカにおける労働の生産性をもたらしたのは安息日厳守主義であつたと言っても過言ではない。

しかしまた，強制力を行使して全員に安息日を守らせるというやり方は，そのメンタリティにおいて，現代アメリカが他国に対して平気で“正義”を押しつけようとする強引な外交政策ともつながっているように思われる。家長の責任と権限が，大家族たる共同体の家長としての為政者へと拡大解釈されたように，今度は世界の家長たるアメリカという意識へと広げられて，それが“世界の警察官”と言われるような対外的態度になって現れているように見受けられるのである。この点の解明は一つの興味深い課題であろう。

いずれにしろ安息日厳守主義が初期アメリカにおいて，広く深い影響を及ぼしたことは確かである。そしてそれはアメリカの人と社会と文化を形作る一つの決定的な要因となった。アメリカという国を正しく理解するには，こうした側面の認識が不可欠だと思われるのである。

## 注

- (1) 拙稿「宗教と法と経済——米国日曜法訴訟の一考察」(『北陸大学紀要』22号[1998]:189-201)参照。
- (2) Anthony Lewis, *New York Times*, May 30, 1961.
- (3) 366 U.S.433,446等。
- (4) David N. Laband and Deborah H. Heinbuch, *Blue Laws: The History, Economics and Politics of Sunday-Closing Laws* (Lexington, Mass.: D. C. Heath & Co., 1987), 48-9.
- (5) さらに言えば安息日厳守主義は、アメリカのみならず現代のキリスト教世界全体にかかわる、すぐれて今日的な問題ともなっている。教皇ヨハネ・パウロ二世の使徒的書簡『主の日——日曜日の重要性』(宮越俊光訳。カトリック中央協議会発行。1999年)参照。
- (6) 「安息日厳守主義は宗教、社会、経済の各領域を包含」している (Keith L. Sprunger, “English and Dutch Sabbatarianism and the Development of Puritan Social Theology (1600-1660),” *Church History* 51 [1982]: 26.
- (7) Sprunger, 27.
- (8) 『スポーツの書』は、こう告げている: 「……一部の清教徒及び極端に固苦しい人々……は、善良な臣民が合法的なるクリエーションと公正な運動を、日曜その他の聖日に、午後の説教または礼拝の後に行うのを禁じたり、不法に罰したりして (いる)」 「このようなことは二つの害悪を生み出さずにはおかない。その一つは、多くの人々の回心を妨げることである。彼らの司祭たちは、われわれの信仰においては公正な楽しみやレクリエーションはどれも正当ではなく、かつ受け入れられないと説いて、この機会を利用して彼らを悲しませている。……もう一つの不都合は、こうした禁止は一般の身分の低い民が、余または余の後継者が彼らを用いたい機会の生じた時に、彼らの肉体が戦いに有能となれるような運動をすることを妨げてしまう。そうして、その代わりにけがらわしい酒びたりや泥酔を引き起こし、酒場で怠惰な、不平のむだ話を多く生み出すのである。一般大衆は週日の働くべき日にはずっと労働し生計を立てねばならないのであるから、日曜や聖日に運動しなかったらいったい彼らはいつ運動できるのであろうか。……」 H. Gee and W. J. Hardy, eds., *Documents Illustrative of English Church History* (London: Macmillan & Co., 1910), 528-30 [邦訳: ヘンリー・ベッテンソン編, 島田福安訳『キリスト教文書資料集』(聖書図書刊行会, 1962), 382-83頁より]。
- (9) Winton U. Solberg, *Redeem the Time: The Puritan Sabbath in Early America* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1977), 77.
- (10) [Edward Johnson], *Johnson's Wonder-Working Providence 1628-1651*, ed. J. Franklin Jameson (New York: Charles Scribner's Sons, 1910), 23 [邦訳: 大下尚一訳『アメリカ古典文庫⑤ピューリタニズム』(研究社, 1976), 58-59頁]。
- (11) William Bradford, *Of Plymouth Plantation 1620-1649*, ed. Samuel Eliot Morison (New York: Alfred A. Knopf, 1963), 25 [邦訳: 『ピューリタニズム』, 38頁]。
- (12) Ibid., n. 5.
- (13) Christopher Hill, *Society and Puritanism in Pre-Revolutionary England* (New York: Schocken Books, 1964), 207.
- (14) Cotton Mather, *Magnalia Christi Americana*, Books I and II, ed. Kenneth B. Murdock (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 1977), 125. 引用文中の傍点は原文ではイタリックであることを示す。以下同様。
- (15) Solberg, 37.
- (16) Sprunger, 29. David Hall, *World of Wonder, Days of Judgment: Popular Religious Belief in Early New England* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1990), 81, 同書104頁等をも参照。
- (17) Solberg, 114.
- (18) William Walker, *The Creeds and Platforms of Congregationalism* (New York: Charles Scribner's Sons, 1893), 429.
- (19) John Winthrop, *The History of New England From 1630 To 1649*, ed. James Savage, vol. 1 (Boston: Little, Brown & Co., 1853), 63.
- (20) Solberg, 138.
- (21) *Diary of Cotton Mather*, vol.1 (1681-1709), ed. Worthington Chauncey Ford (New York: Frederick Ugar Pub. Co., n.d.), 29-30.
- (22) Ibid., 76.
- (23) Ibid., 215.
- (24) Mather, *Magnalia*, 192-3.
- (25) Jonathan Edwards, *The Works of Jonathan Edwards*, vol.1, ed. Edward Hickman (Edinburgh: The Banner of Truth Trust, 1834; reprint, 1992), 102.
- (26) Horton Davies, *The Worship of the American Puritans, 1629-1730* (New York: Peter Lang, 1990), 54.

- (27) *American State Papers Bearing on Sunday Legislation*, ed. William Addison Blakely (New York : Da Capo Press, 1970), 33. 植民地時代の他の日曜法については同書34-58頁参照。
- (28) Solberg, 86.
- (29) Ibid, 88.
- (30) Ibid, 170-71.
- (31) Ibid, 181-2.
- (32) “blue law” の語源については二つの見方がある。ひとつは紙の色から、特に、印刷された法令が青い色の紙に包まれていたことに由来するとする。もうひとつは、法令が実施される際の“厳格さ”のゆえにそう呼ばれたとする。あるいは両方の意味が込められていたのかも知れない。R. R. Henman, *The Blue Laws of New Haven Colony, usually called Blue Laws of Connecticut* (Hartford, Conn.: Case, Tiffany & Co., 1838), iv; J. Hammond Trumbull, *The True-Blue Laws of Connecticut and New Haven and the False Blue-Laws Invented by the Rev. Samuel Peters* (Hartford, Conn.: American Publishing Company, 1876), 9, 参照。
- (33) Solberg, 113.
- (34) Henman, 121-4; Trumbull, 301-7.
- (35) Henman, 122; Trumbull, 304.
- (36) Solberg, 113.
- (37) Ibid, 88.
- (38) Ibid, 169.
- (39) そのような場合、安息日の法律は“異端”をたたきつぶすための強力な武器となった (Ibid, 181)。
- (40) Ibid, 159.
- (41) *The Book of the General Lawes and Libertyes concerning the Inhabitants of the Massachusetts* [1648] (reprint, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1929), 20.
- (42) Ibid, 24.
- (43) Ibid, 13.
- (44) Ibid, 4-5.
- (45) Solberg, 162-4.
- (46) Ibid, 165.
- (47) Ibid, 177-8, 196. それぞれの植民地にさまざまな宗派が存在していたが、安息日を厳守させるという点では一致していたと言える。Alice Morse Earle, *Home Life in Colonial Days* (1898; reprint, Stockbridge, Mass.: Berkshire House Publishers, 1993), 387等参照。
- (48) Solberg, 44-5, 130.
- (49) Nathaniel B. Shurtleff, ed., *Records of the Governor and Company of the Massachusetts Bay in New England*, vol.1 (Boston: The Press of William White, 1853), 109.
- (50) Everett H. Emerson, *John Cotton* (New York: Twayne Publishers, Inc., 1965), 93.
- (51) Solberg, 163参照。
- (52) Ibid, 163, 187.
- (53) Glenn Hinson, “The Puritan Concern for the Sabbath” (*Liturgy* 8, n.1 [1989]), 12.
- (54) Solberg, 177.
- (55) Ibid, 268.
- (56) Alice Morse Earle, *The Sabbath in Puritan New England* (1891; reprint, Williamstown, Mass.: Corner House Publishers, 1974), 257.
- (57) Hall, 91.
- (58) Ibid, 81, 73.
- (59) Ibid, 104.
- (60) *Magnalia*, bk.6, p.9 (Solberg, 293)
- (61) Solberg, 183.
- (62) Ibid, 185.
- (63) Thomas Shepard, *Theses Sabbaticae: Or, The Doctrine of the Sabbath* (London, 1649), in *The Works of Thomas Shepard*, ed. John A. Albro, vol.3 (Boston: Doctrinal Tract & Book Society, 1853) : 7-271.
- (64) Solberg, 154等参照。
- (65) Shepard, 154-71.
- (66) Ibid, 258.
- (67) Ibid, 258-59.
- (68) Ibid, 260.
- (69) Ibid, 261.
- (70) シェパードより数十年後になるが、コットン・マザーも日記にこう書いている：「安息日が来ると、私は心をこめて瞑想する、天地創造のこと、あがないのこと、そして神の民に残されている [安息日

の] 休みのことを。……安息日の到来は私にとって常に、喜び迎えるすばらしいものだ [1718年11月]]  
(*Diary of Cotton Mather*, vol.II (1709-1724), 565. やはり安息日は、喜びの日であったのである。

(71) Shepard, 262.

(72) Ibid., 26.

(73) Charles E. Hambrick-Stowe, *The Practice of Piety: Puritan Devotional Disciplines in Seventeenth-Century New England* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1982), 98. 同書203-6をも参照。

(74) Ibid., 98.

(75) Ibid.

(76) Shepard, 262-63.

(77) Davies, 51.

(78) Ibid.

(79) Solberg, 300.

(80) Ibid., 299.

[付記] 本研究は「1999年度北陸大学特別研究助成」に負うものである。記して感謝の意を表したい。